

振り返り、そして現在。

高橋 満（仙台市水道局給水部管路整備課基幹管路係長）（当時所属：管路整備課）

3月11日（金）普段着ないスーツを身にまとい出勤した。局に到着後は大事なスーツは自分のロッカーにシワにならないようにしまい、着慣れた作業着に着替え、朝から少しウキウキした気分で終業時間まであと2時間ちょっと、仕事も手につかない状態になっていた。その日は、40名近く在籍する課主催の直属係長の定年退職送別会の日だった。

14時46分、自分の席から離れ同じ課の事業費を管理している先輩の席の近くに行っていると、下から突き上げるような揺れが始まり、これまでに経験したことのない激しい揺れに変わる。目の前では娘さんの中学卒業式で休暇を取っている別の係長のデスクトップPCが机から落ちそうになっているのを必死に抑え揺れが収まるのを待った。

長く感じられた揺れが収まり、いつもペアを組んでいる相棒と市の中心部に近い現場と郊外の現場の保全確認のため公用車を走らせた。走らせたつもりが水道局の敷地を出た数百メートルで市の中心部に向かう道路は大渋滞、一向に動く様子が見られないため、違う道を通り先に郊外の現場へと向かった。二つの現場の安全な状態を確認後、車載無線で管路本部に報告を行い、局には戻らず近くにある維持管理部署に行くと言ったのが20時近くだったと記憶する。辺りは停電で真っ暗な状態、もちろん東北最大の繁華街、国分町が照らし出す光りもない。ふと空を見上げたら無数の星が輝いており、山育ちの私は『仙台でもこんなに星が見れるんだあ〜』と思ったのが今でも忘れられない。維持管理部署の傘下に入った後は、自宅が近いということもあり、局本庁舎には戻ることもなく、国見第二配水幹線の通水作業と、ブロック給水のための圧力調整弁の立ち上げを担当し、大事なスーツを持ち帰ったのは発災から2週間後であった。そして現在、私はあの日、退職を祝うはずであった係長の席に4年前から座っており、あの日、自分が通水作業を担当した国見第二配水幹線の延伸工事の担当係になっている。

4月11日（月）他都市応援の第一陣として給水車を運転し石巻地方広域水道企業団の東松島市にある管理事務所に向かっていた。一緒にペアを組むのは3つ年上でバイタリティ溢れる先輩（井上先輩）。局を出発した時点からやる気満々な状態が物凄く伝わって来ていた。私はこれまで多くの災害派遣を経験してきた。阪神淡路大震災、新潟県中越地震、宮城県北部地震など、東日本大震災後では熊本地震にも行った。その派遣経験から心掛けているのは、特別なことをやりに行くのではなく気負うことなく普段と同じことをするというこ

と。そうすることで最高のパフォーマンスに繋がると思っている。その時先輩からは『こいつテンション低いな』と思われていたかも知れない。

担当になった東松島市宮戸地区は、一部橋が崩落し、自衛隊による仮橋を通らなければ行くことができず、これまで水道事業体は入っていない地域、自衛隊だけが応急給水活動を行っていたのだが、指示された幾つかの漁港を巡回するが誰も水を必要としない。

一番奥の漁港の更に奥まった所にある新築の家屋に着いた時、そこの奥さんに水は必要ないですかと尋ねると『もう今日の分は貰ったよ』とのこと。不思議に思い詳しく聞いたところ、自衛隊車両は1tの給水タンクを牽引したトラックが2〜3台しかおらず、一日〇ℓと制限されているという。発災からすでに一ヶ月を経とうとしているのに…。思考が停止している私の隣からバイタリティ溢れる先輩は、『飲み水以外にも必要じゃないの？必要なら何回でも水を運んでくるから遠慮しないで！』と言い終わらないうちに歩き出し『これに入れてあげるから』と海苔の養殖に使っているという2m四方・深さ20cmのプラスチック製の桶を独断で拝借し、使い勝手の良さそうな場所に移動すると、私に目で合図を送るので、つられるように給水車の加圧の準備をした。

次の日からは、各漁港を巡回し最後は海苔養殖の桶を満水にし（私はこれを井上用水と心の中で呼んでいた。）、奥さんと談笑してから引き上げるのが我々の作業内容になっていた。

ペアを組む先輩の営業努力により巡回沿線の家屋の前に並ぶポリタンクの数が増え、飲料水だけではなく生活用水として水を求めているお宅が多くなっていったある日、奥さんは（井上用水を使い）庭先で津波の被害を受けた旧自宅から引き上げてきたアルバムなどを洗っていた。挨拶しながら近付くと奥さんから『うちの娘の写真見る？美人なんだよ〜』と言われ見せて貰うと、成人式の時のような写真。先輩と二人で『お〜美人ですね〜』と話すと、『車だけ見つかって、本人はまだ見つからないの』と。松島で働いていた時に被災し自宅が心配になり宮戸地区に向かう途中の野蒜地区で津波の犠牲になった。物凄く悲しいことを明るく前向きな気持ちに切り替え、復興に向かって前に進もうとしている姿から勇気を貰った一日だった。あれから10年が経過し、バイタリティ溢れる先輩は課長になり、4月から私の直属の上司になっている。